



不死王は
スローライフを
希望します

FUSHIOU WA SLOW LIFE WO
KIBOU SHIMASU

6

小狐丸

Kogitsunemaru

ill. 高瀬コウ



登場人物紹介

MAIN CHARACTERS

シャウト

諜報に長けた魔族で、
ルバスの指示で
各地を飛び回っている。

ルバス

怪しげな実験の果てに、
リッチロードにまで
成り上がった元魔族。
戦闘の腕は皆無。

シグムンド

本編の主人公。
最底辺の魔物・ゴーストから、
最強の吸血鬼・
不死王に進化する。
スローライフを志す。

ギータ

けんぞく
古竜の管属である竜人。
真面目で強い。

ポーラ

難民の少女。
シグムンドが作った
孤児院に保護されている。

ミル

エルフの少女。
母・ルノーラと共に
シグムンドに保護されている。
本名はミルレー。

ララ

エルフの少女。
いつも姉のミルと
一緒に遊んでいる。
本名はララーナ。

一話 こっそり覗き見^{のぞ}

最弱の魔物ゴーストから、この世界最強の存在である特殊なバンパイアロードであるエレボロスロードにまで進化し成り上がった俺——シグムンド。

深淵^{しんえん}の森に続いて、俺は草原地帯にも城塞都市という確固とした拠点^{きょてん}を築いた。そこに古竜^{こりゅう}の長である黄金竜^{おうごんりゅう}のオオ爺^{じい}サマが移り棲み、眷属^{けんぞく}である竜人を創り出したのだが、彼らを崇める魔王国の竜人族にそのことを知られてしまった。

そもそも竜人族っていうのは、オオ爺サマが属性竜^{ぞくせいりゅう}という竜種の遺^{のこ}したアイテムを使って生み出した眷属^{けんぞく}を祖先とする一族らしい。それでオオ爺サマや、先祖と同じ方法で創られた竜人を崇めているわけだな。

そこから始まる竜人族たちの大騒ぎ。竜人族の長老は、オオ爺サマ詣^{もつ}でがしたいばかりに、西方諸国でも希少で高価な竜人族の高級茶葉で城塞都市と交易^{こうぎ}しようと考えた。

俺的には、美味しいお茶が飲めるのならと、これまで魔王国としていた交易の回数を増やすのを了承したんだ。

魔王国の第二王子で、魔王国と俺との窓口として城塞都市の駐在員^{ちゆうざい いん}のようになってるダー

ヴィッドは、その件で魔王国に一旦戻り、魔王や幹部たちと話し合いを行うことにしたらしい。

そこで、俺はこっそりと姿と気配を消して会議を覗き見ることにしたんだ。
バンパイアである俺なら、霧になり魔力と気配を隠蔽すれば、魔王でも気が付かないからな。



ここは西方諸国に近い魔王国の国境近く。かつて魔王国が西方諸国に仕掛けた戦争も終わり、その西方諸国との交易の窓口として栄える街。

魔王国では珍しく、高い外壁に守られた街の、その中でも見るからに守りを固めた砦のような建物——街の代官所でその会議は行われていた。

そこに魔王国の宰相デモリスと文官の長アバドン、竜人族の長老、商業ギルドの本部長、冒険者ギルドの支部長、錬金術師ギルドの長老、薬師ギルドの本部長と、そうそうたる面々が集う。

一癖も二癖もありそうな面々を前に、魔王国宰相デモリスが話し始める。

「今日、わざわざお主らと呼んだのは、他でもない。耳のいいお主らなら知っているだろう、草原地帯についてじゃ」

草原地帯というワードに、集まった各ギルド関係者が騒つく。

どこの国も、どんな者も手をつけられなかった草原地帯に、突如城塞都市が出現したという話は、

耳聡い者ならおそろく知っているだろう。

特に、そこに金の匂いを嗅ぎつけた商業ギルドなどは、既に何度か冒険者を派遣し調査している。とはいえ現状、魔王国のキャラバン以外を受け入れていない城塞都市では、正規の手順を踏んでいない者に関しては門前払いしている。そのため、中の情報は魔王国の依頼で護衛をした冒険者経由でしか入ってきていない。

その上、ダーヴィッドが護衛の冒険者まで慎重に選別しているため、守秘義務を犯して情報を売る冒険者も少なく、草原地帯に城塞都市が確かにあるという事実以外は、ほぼ何も分かっていない状況だった。

もちろん、ダーヴィッドが主導して移民事業が行われていたし、貧しい砂漠の小国ウル王国でも纏まった人数の移民を募集したことなどは知られている。だが、各種ギルドは一切囁んでいないので、ダーヴィッドが中心になって動いていることもあり、草原地帯の城塞都市は魔王国の飛び地という認識だ。

それを踏まえて、本題に入る前にアバドンからの説明が始まる。

「まず言っておこう。あの草原地帯にある城塞都市は、魔王国とは関係ない。一応、駐在することを許され、なおかつ信頼関係から仕事を依頼されたり交易を行ったりしてはいるが、そもそも魔王国に、草原地帯に城塞都市を造り維持する力などない」

誤解のないよう、チラリと商業ギルドの本部長を見て最初に釘を刺すアバドン。

そこまで聞いて最初に口を開いたのは、冒険者ギルドの支部長グランツだった。彼は、現役時代Aランクの冒険者だった叩き上げながら、調整能力や事務処理能力にも秀でる。近い将来、本部長——いわゆるグランドマスターと呼ばれる冒険者ギルドのトップになると目されていた。

「……草原地帯に古竜が現れたという噂は俺も聞いている。子供の頃、お伽噺で聞いた神の使徒様だ。まさか、古竜が支配しているのか？」

「いえ、古竜様が治めているわけではありません。あの地は、その黄金竜様が助力を頼むような存在が統べる地と言えは分かるでしょうか」

「オイオイ、マジかよ」

グランツは魔王国の二人を除けば、一番、草原地帯について情報を得ていた。それはそうだ。ダーヴィッドが率いるキヤラバンの護衛にも冒険者はいたのだから。

その関係で、古竜にちよつかいを出した馬鹿が排除されているのも知っていた。

そこにアバドンから、あの地は黄金竜の力で成り立っているのではなく、それ以上の存在が治める地だと聞かされ、驚きのあまり口調が乱れてしまった。

「まあ、そんな話はいいではないですか。我らを集めたということは、深淵の森の素材を売ってくれるのでしょうか？ 少し前から、少量ですが、魔王国で深淵の森の素材が出回っているのは知っていますよ」

「待てモーガン。そんなことは後にしろ。草原地帯の支配者がどんな存在なのか分からなければ、商売以前の問題だろう！」

グランツとアバドンのやり取りを前に、どうでもいいと話を变えようとしたのは、商業ギルドの本部長モーガン。そのモーガンが望むのは、深淵の森の貴重な素材のみ。古竜がどうかいうことは関係ない。いや、むしろ古竜の素材を得られないか、密かに考えているような男だ。

「そんなこととは何ですか。私どもも魔王国が深淵の森の貴重な素材を独り占めするのではと、抗議する用意をしていたところに、ちょうどお話が掛かったのです。その話をして何が悪いのです」

「お前は、その深淵の森の素材を誰が供給しているのか考えないのか！」

「まあまあ、お二人とも落ち着いて」

商業ギルドの利益しか頭にないモーガンと、それ以前に草原地帯という不可侵だった地を治める存在について知るべきだと主張するグランツがぶつかり、それをアバドンが諫める。

「まず、商業ギルドに言っておきたい。草原地帯を統べる方は、別に深淵の森の素材を魔王国に売る必要はないということを。現在、交易が続いているのは、ひとえにダーヴィッド殿下の努力と城塞都市側の魔王国への配慮によります」

アバドンがそう続けて説明し、グランツが頷く。

「そうだろうな。あの先代魔王ですら外縁部に入るのが精一杯だった深淵の森だ。その南の草原地帯は、下手すりゃあ森の魔物の餌場になりかねない。そんな場所を統べていることは、森の魔

物が恐れて近付かない存在ってことだぞ。分かっているのか？」

「ふん。どうせ何かカラクリがあるんだろう。どちらにせよ、素材を魔王国が独占するのは容認で
さん」

しかし、モーガンは二人の説明にも納得していない。

「むしろは、貴重な深淵の森の素材を少しでも回してもらえばいい」

「そうじゃな。今まで諦めていた病を治すことができるかもしれない」

その点、そんな風に口をそろえて言う錬金術師ギルドと薬師ギルドは謙虚だ。

錬金術師ギルドは触媒として森の魔物素材を、薬師ギルドは希少な薬草類を望んでいるだけだ。
身の程を弁えているのか、手に入ればラッキーくらいに考えている。

ただ、モーガンは失敗したかもしれない。

（なあ、あの太った奴、がめつくさないか？）

（あの男は典型的な利を追いつめる商人ですから）

（そうですね。ご主人様がご不快なら消しますか？）

この話し合いは、シグムンドと、その眷属でもある執事のセブルとメイドのリーファの三人が、
姿を消して見ているのだから。

三人のモーガンへの好感度が、これ以上ないくらい低くなったのは当然だろう。

二話 荒れる会合

俺たちが隠れて見ている話し合い。

俺たちの存在がどういったものなのか、慎重に把握しようとしている冒険者ギルドのグランツに
は好感が持てる。

逆に、なぜ自分たちを嘯ませないのかと、不満を隠さない商業ギルドのモーガンは嫌な感じだな。
ここで、ずっと我慢していた様子の竜人族の長老が口を開く。

「お主らのことなどどうでもいいんじや。そもそも、草原地帯との交易回数を増やしてただける
ことになったのは、ワシらの訴えを黄金竜様が認めてくれたから。魔王国としては筋を通してお主
らに話しておく必要があったのかもしれないが、後から来て出しゃばるな小僧共！」

「なっ!? 小僧だと！」

「まあ、竜人族の長老からすれば、人族の俺なんて小僧だろうな」

竜人族の長老に小僧呼ばわりされたモーガンが怒っている。それとは対照的に、冒険者ギルドの
グランツは冷静だな。

「あの、長老……」

「分かっておる！ あの地の主人が黄金竜様ではないことくらい！」

長老の口ぶりが、オオ爺サマが草原地帯を統べているように聞こえるとアバドンは注意しようとしたみたいだった。竜人族的には分かっているにしても信仰の対象だからな。その辺は仕方ない。むしろ、オオ爺サマが責任者でも俺は全然構わない。

「でじゃー！ ワシらは黄金竜様に詣でるために交易回数を増やして欲しいと願い出たんじゃ。それを森神様^{もりがみさま}に聞き届けていただいた。ワシらは竜人族の茶葉を交易の柱にと考えておる。お主ら、深淵の森の素材と言うが、対価はあるのか？」

「ぐっ!? 竜人族の茶葉だと！ 同じ重さの金より貴重なものではないか！」

……色々突っ込みたいところがあるな。

（ご主人様を森神様と呼ぶとは、ピッタリですね）

（深淵の森の支配者ですから、竜人族の長老もなかなかセンスがいいですね）

（いや、神なんて畏れ多いから）

念話で話しかけてきたリーファとセブルに俺はそう答えた。

神に創られたオオ爺サマたちならいざ知らず、俺が神様扱いされるのは畏れ多いよ。

それに、先ほどから普通は俺と交易できないかのような口ぶりで話しているけど、今も少数だけど、ガッツある商人は魔物素材を求めて城塞都市に來ている。商人つてのは図太いよな。当然、売る素材は俺たちのどうでもいいものにはなるけど、商人たちはそれを大金で買っていき、さらに

大金で売るわけだ。

「何度も言うようだが、竜人族の長老が森神様と呼ぶ存在は、特にお金を欲していない。今は建材関係の需要はあるが、それもすぐに落ち着くだろう。竜人族の高級茶葉は、向こうも好感触だったようだが。実際問題、商業ギルドの助けは必要ないのだ。ただ、魔王国が利益を独占しているように勘違いされても困るので、あなたたちを招いて話し合いの場を設けたまで」

「なっ!? 魔王国は、商業ギルドが不要だと言うのか！」

「要らんじやろう」

「長老」

アバドンが今回の会合の意味を説明すると、モーガンが喚き出す。それに追い討ちを掛けるように、竜人族の長老がモーガンを煽^{あお}るようなことを言うもんだから、收拾がつかなくなりそうだ。まあ、見ている俺たちは面白いからいいんだけど。

「すまん。思ったことがつい口から出てしまった」

「何という扱いだ！ こんなに馬鹿にされたのは初めてだ！」

（竜人族の長老、わざと煽ってるな）

（竜人族は、竜を始祖とする特別な種族であるという高いプライドを持っていますからな。あのモーガンのような、無意識に魔族を下に見る輩^{やから}にきつく当たるのも仕方ないかと）

（あれでも商業ギルドの本部長なのですが……）

俺の言葉に、セブルとリーファも呆れたような声を漏らした。

憤るモーガンに対して、醒めた表情のグランツが口を開く。

「なら、商業ギルドは出て行っても構わないんだぜ。現状、草原地帯は商業ギルドがなくても困らない。……魔王国は多少影響を受けるかもしれないねえが、それでも限定的だ。何なら冒険者ギルドが、商業ギルドの抜けた穴を埋める手伝いをしてもいい」

「うむ。錬金術師ギルドのネットワークも使えるぞ」

「薬師ギルドもですね」

「なっ!? お前たちっ!!」

グランツがモーガンにこの件から外れてもいいと言う。

彼の言うように、魔王国も商業ギルドが撤退すると多少の影響はあるが、あくまで多少だ。魔王国は、先代魔王の傍若無人な振る舞いから起こった長い戦争の影響で、以前は他種族の運営するギルドが存在しなかった。そのため現在でもそういったギルドの立場は高いとは言えず、魔王国内のランクの高い魔物素材や、竜人族の茶葉などの希少品を欲しているのは商業ギルドの側なのだ。セブルが言うには、これが西方諸国なら違っただろうということだ。西方諸国では商業ギルドは、かなり大きな力を持っているらしい。

まあ、そんなことは置いておいて、デモリスやアバドンが草原地帯にモーガンのような人間をのさばらせる手助けをするわけがない。

俺は基本的に草原地帯に関してあまり口は出さない方だけど、移民を受け入れる際に、ダーヴィッド君に念入りに面接してもらってふるいにかけているからな。デモリスとアバドンも、あの手のタイプはダメだと分かっているはずだ。

「モーガン殿。繰り返しますが正直な話、草原地帯に商業ギルドは必要ないのです。魔物素材の買い取りも、魔王国の冒険者ギルドで済ませることが可能ですしね」

「草原地帯じゃ、魔物が強力すぎて高ランクの冒険者でも受ける仕事はなさそうだな。しかし、アバドン殿。可能なら冒険者ギルドの支部を置きたい。買い取りだけなら場所はどこでもいいが、魔王国より草原地帯で買い取った方が西方諸国に売りやすいからな」

「待て! 待ってくれ!」

アバドンとグランツが、もう商業ギルドを外す方向で話し始め、そこでモーガンも本気で慌て始める。

(なあ、会合って、こんなに時間かかるものなのか?)

(今回は、様々な思惑が重なっていますからこんなものでしょう)

(魔族は長々と話し合うことを嫌う傾向はありますが、人族は分かりませんね)

俺の問いにリーファとセブルが答えてくれた。

まあ、僅かに残る記憶を思い起こしても、俺の前世でも会議なんてこんなものだった。

続けてセブルとリーファが言うには、魔族は脳筋だから、会議なんてするのは文官気質のデモ

リスやアバドンみたいな人だけで、今回のように長引くのは稀らしい。それともうかと思う。しかし、この交易の件に関しては、俺も後で魔王国側と相談した方がいいな

三話 サクッと打ち合わせ

あの後、商業ギルドの本部長モーガンは、プリプリ怒って帰っていった。

とはいえ、冒険者ギルドのグランツと錬金術師ギルド、薬師ギルドは無条件で魔王国に協力することを約束したので、その辺の条件を詰めるために、明日も一度打ち合わせをすることになったらしい。

それで、俺たちはどうしたかっていうと、デモリスとアバドンの前に姿を現した。

「ッ!? シグムンド殿っ!」

「なっ!? セブール殿にリーファ殿までっ!」

「やあ、見てたよ」

「はい。一部始終、拝見致しました」

突然、部屋に現れた俺たちに驚くデモリスとアバドンだけど、流石は魔王国を動かす重鎮だけあって、すぐに落ち着いたので、そのまま軽く話し合いをすることにした。

「竜人族の茶葉は俺的にもありがたいから、スムーズに交易できるようにダーヴィッド君にマジックバッグを預けたんだ。それで魔物素材も新鮮な状態で持ち帰れると思ったんだが……いろんな利権が絡んで、ごたつかせてしまったみたいだな」

「……西方諸国の人間からすると、魔王国からの魔物素材ですら貴重ですから。それが深淵の森の魔物素材となると、商業ギルドの本部長のように、何とかして食い込もうとする気持ちは分かります」

「モーガンはやたらとマウントを取りたがる男ですから。我ら魔族のことも下に見ておるのを隠しきれていませんしな」

貴重過ぎる深淵の森の魔物素材もよし悪しだな。モーガンみたいに、いらぬ欲をかいてしまう。アバドンとデモリスも、多少は仕方ないと思っていたようだが、モーガンという男は想定以上に愚かだったみたいだ。

そこでセブールから提案があった。

「合同の買取所を設置するのはどうでしょう」

「商業ギルドはともかく、草原地帯の城塞都市に買取所を置くのはありだな。今も本当にごく少数ながらガッツある商人が来ているけど、いつも俺やセブールがいて対応できるわけじゃないかな」

一般的には素材の買い取りを仕切るのは商業ギルドってことになるらしいが、セブールはそう

じゃない買取所はどうかと言ってきたわけだ。確かに、冒険者ギルドでも買い取りはするそうだし、薬草は薬師ギルドが買い取ってくれるだろう。錬金術に使えるものは錬金術師ギルドが買い取ればいい。

「合同買取所ですな。それはいい案かもしれませんが」

「ああ、商業ギルドもどうしても言うなら囁かせてもいいしな」

デモリスとアバドンも、セプールの提案に好感触な反応をみせる。

冒険者ギルド単体で買い取りをすると、魔物素材を中心に買い取るのだと所属する冒険者たちが誤解する可能性がある。

草原地帯の魔物なら普通の冒険者でも討伐可能だけど、森から出てきた魔物は無理らしいから、基本的にこれからも魔物素材は俺がとつてくる形がいいだろうな。

まあ、そもそも森の魔物素材を欲するようなのは、依頼として張り出さないだろうけど。

「旦那様、合同買取所を建てるスペースは安価で貸し出し、建物の建設は各ギルドに任せただ方がいいかと思います」

セプールの提案に俺は頷く。

「ああ、土地を売ってしまうのは問題あるか。それに俺が建物まで与えるのも違うよな」

「はい。その程度、各ギルドが協力すれば可能でしょうから」

合同買取所の建物は、自分たちで建てさせる形になりそうだ。確かに、集めた移民たちはともか

く、利益を求めてやってくるギルドに俺が全部用意して与えるなんてやり過ぎだな。

「それがいい。シグモンド殿には、スペースの確保だけ指示していただければよろしいかと」

「ですね。商業ギルドは別にして、他のギルドは今のところ下手に出ているが、甘やかすと図に乗るかもしれないしな」

デモリスとアバドンも建物くらいは自分たちで用意させるという意見に賛成した。

「了解。空き地はまだまだあるから、適当な場所を用意するよ」

魔王国が駐屯する場所や建物は俺が用意したけど、これはダーヴィッド君たちにあれこれお世話になっているからだ。ギルド関係者にそこまでする必要はないっていうのが、みんなの認識だな。

「あとは竜人族の茶葉と森の魔物素材とのレートはどうするかだな。すごく貴重な茶葉なんだろう？」

「そうですね。魔王国どころか、西方諸国でもみな金に糸目をつけず求める茶葉です」

茶葉が育つ環境や条件から、竜人族が住む地でしか採れない高級茶葉。先ほどの話し合いでも聞こえたが、同じ重さの金よりずっと高価なものらしい。

自然に生育するだけで人工的には増やせないそうで、大量に出回ることはないのも高額になる理由だとか。

ゴーレムたちに頼めば栽培はできそうな気もするけど、さすがにそれは茶葉の価値を下げてしまう形になってしまうからまずいだろう。

「まあ、その辺の細かな話はセプールに任せるよ」

「お任せください」

この世界の常識に疎い俺が交易のレートなんて決められるわけがない。そこはセブルにお任せだ。

実際、今も建材を買ったり、麦や塩を売ったりするのはセブルに一任しているしな。

「では、わしらは各ギルドと話を詰めて、買取所の建設打ち合わせをしておくかの」

「そうですね。ダーヴィッド殿下が監督した方がいいでしょうし」

デモリスとアバドンは、ギルドのサポートをするつもりようだ。何気にダーヴィッド君に仕事
が押し付けられているけど、魔王国が手綱を握った方がいいだろうし仕方ないか。

その後、竜人族も協力して合同買取所を建てることに決めたみたい。

なぜ、竜人族もかと言うと、単純に協力する流れでオオ爺サマに会いにいきたくらだろう。まあ、身体能力の高い竜人族なら邪魔にはならないし、許可しておいた。竜人族の始祖として崇められているギータたちは困るかもしれないけどな。

四話 魔王国にも困った奴はいる

魔王国が引き起こした大陸を巻き込む大きな戦争が終わり、十年以上。落ち着きつつある魔王国と西方諸国だが、それを面白く思っていない者も当然存在する。

その筆頭は言うに及ばずジーラッド聖国だが、魔王国にも少数ながら平穏よりも混沌を望む輩が存在していた。

地下の暗い部屋に、魔物と人間を合成したキメラの失敗作が並んでいる。その光景は、この主人がまともな人間ではないことを物語っている。

そこに顔色を青くさせた一人の男が戻ってきて、部屋の主人に声を掛ける。

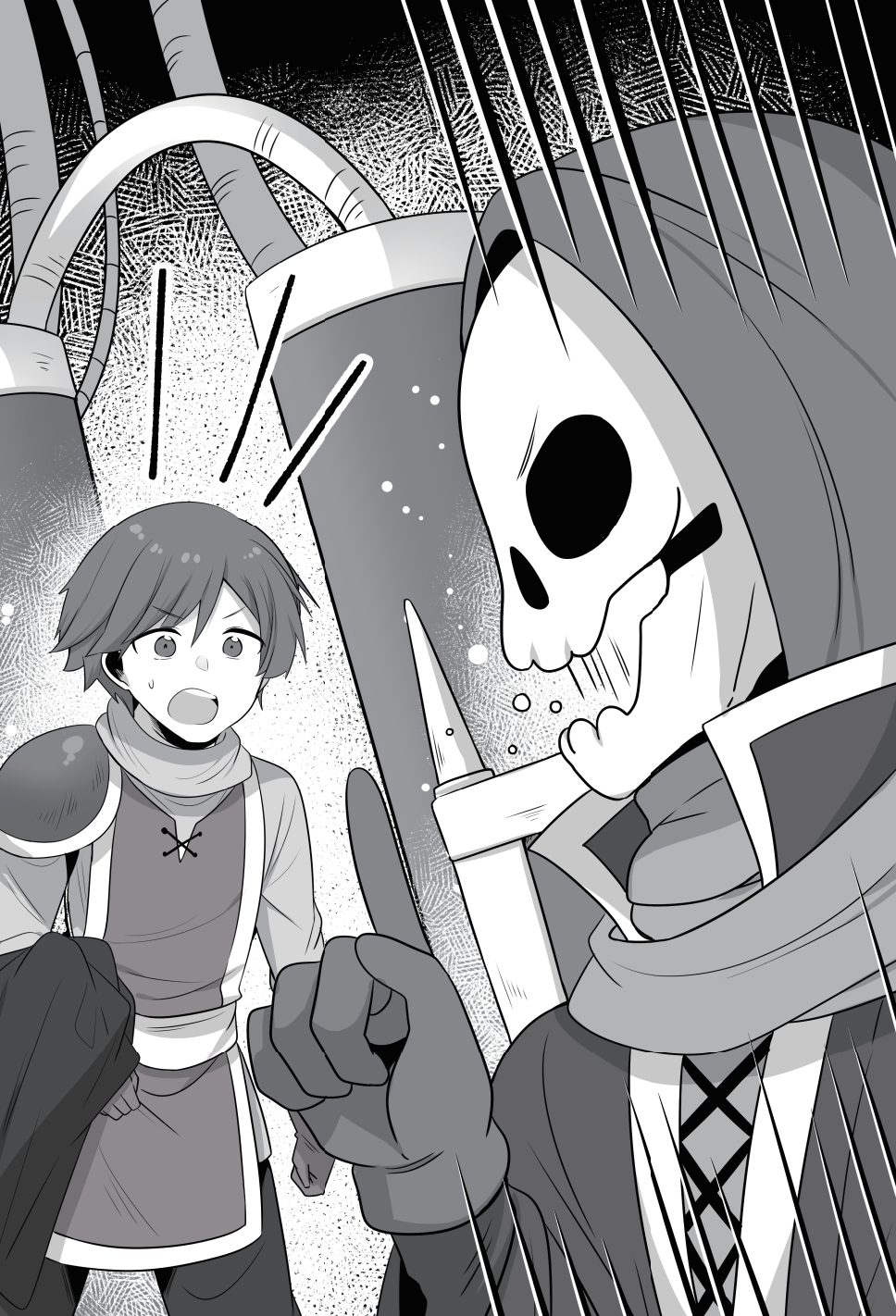
「ジジイ。あれはヤバイ。無理。近付くのも無理だ」

「……やはりか。じゃが、そこを曲げて、どうにか手に入らんかのう」

「バカ言うな。ジジイ、諦めろ。アレはそんなレベルじゃない！」

「ふむう……」

外から帰ってきた男は、その身を隠していた外套を脱ぎ去る。



現れたのは、細身の浅黒い肌の男。ただ、南方系の人族ではない。紛れもなく魔族だ。

「なあシャウト、本当に少しも可能性はないのか？」

「魔王陛下が羽虫に思えるレベルの相手だぞ。疑うなら、ルバスのジジイが自分のその目で見てくりゃいいだろう！ いや、目はなくなったのか」

「むう……」

シャウトが無謀な依頼だと言うと、ルバスと呼ばれた存在が考え込む。

その顔には皮膚がなく骨が露出し、目があるはずの部分に眼球はなく、そこは妖しく光るのみ。

「ジジイがいくらリッチだといっても、何もできずに消されるだけだと思うぞ。悪いことは言わねえ。かわらない方がいい」

「リッチではないわ！ ワシはリッチロードじゃ！」

そう。ルバスは元魔族の魔法使いで、自らリッチロードとなった存在だった。

「いや、ジジイ。リッチロードって言うほど強くないじゃねえか。下手すりゃ人族の中堅冒険者にも討伐されちゃう程度だろう」

「それは仕方ない。もともとが魔王どころか、アバドンやデモリスにもはるかに及ばぬワシがリッチロードとなったとて、奴らからしたら誤差じゃからの」

「それ、リッチロードになる前に分かってりゃよかったのにな」

ルバスは自分を実験台に研究を重ね、ゴースト系魔物の最終形態リッチロードへと至った。それ

自体はすごい成果だ。普通、リッチロードと言えば、やぐさいきゆう厄災級の魔物なのだから。

ところが、シグムンドのように最下級のゴーストから進化し続けてリッチロードに至ったのではなく、独自の術式を編み出し、魔族からリッチロードへと無理矢理変化したせいなのか、その力は元の魔族だった頃から多少強くなった程度だった。もともとルバスは、戦闘方面はからつきだったこともあり、結局シャウトに馬鹿にされるような残念な結果となった。

そのことにルバスはしばらく落ち込んだものの、寿命から解放されたのだからよしとしようと切り替え、今も模索を続けていた。

「いや、まだ諦めるのは早い。何か方法はあるはずじゃ」

「俺はもう草原地帯に近付くのは嫌だからな。俺に敵意がなかったからたまたま見逃してくれたんだと思うが、敵意を向けた瞬間終わるぞ。俺は神が創りし黄金竜よりも強大な存在となって、関わりたくないからな」

「シャウト、そこを何とかならんか？」

「なるか！」

ルバスが望んだのは、さらなる力。レベルアップを繰り返し進化を重ねたシグムンドとは、別方向のアプローチで力を求めている。

そう。ルバスは力を得るために黄金竜の素材を欲していた。

魔物であるリッチロードとなったルバスだが、その性質や性格は魔族だった頃と変わらない。高

位の魔物の中でも人間と変わらぬ理性と知性を持つリッチロードだが、それでも普通は人間に対して攻撃的になるなど、異常な様子をみせるものだ。

それが魔物となった今も魔族の時と変わらないルバスは、魔族だった頃から筋金入りの変人だったとも言えるだろう。

黄金竜の素材でさらなる力を得られるかもしれない。ルバスがそう考えたのであれば、もう諦めるのは難しい。

「なあ、血をちよつとだけでもいいんじゃない。ドラゴンじゃぞ。それも黄金竜じゃ。お伽話の中の存在が草原地帯にいるんじゃないや。諦められるわけがないじゃろう」

「だから無理だつて言ってるだろ！ 何度も言うが、あそこには、黄金竜なんかよりもつとヤベエのがいるんだよ！」

「むう……」

シャウトが言うヤベエのとは、もちろんシグムンドのことだ。

光を克服するどころか、その光属性の魔法を使いこなす特殊なバンパイロード。お堕ちた神を葬ほむる超越者。少しでも知能がある者であれば、ちよつかいなんて出そうと思わない。

魔族の中でも、直接的な戦闘力よりもちやうほうのうりや諜報能力に長けた種族であるシャウトは、ルバスの望む様々なモノを手に入れるため、魔王国はもとより大陸中を飛び回り活動していた。

当然、黄金竜が草原地帯に飛来した情報はすぐに手に入れたし、それを聞いたルバスがその素材

を欲し、調査に向かわされることになったのは必然だっただろう。

だが、そこでシャウトはシグムンドに察知されてしまった。それも当然だ。シグムンドの察知範囲は、深淵の森と草原地帯全域にわたる。異物を察知するのは容易い。

シャウトに敵対する意思がなかったため見逃されたが、もし邪なことを考えれば、一瞬で消されていただろう。

「言っとくけど、あの黄金竜様を傷つけるなんて無理だからな。アレは本物の神使だ。それであのバケモノはそのはるか上なんだ。頼むから俺を巻き込むな」

「むう、シャウト、お前とは長い付き合いじゃろう。そう冷たいことを言わんでくれ」

「俺はまだ死にたくないんだよ！」

シャウトは視界に入れた存在の力量を測るユニークスキルを持っていた。遠目からだがその力で黄金竜とシグムンドを見てしまい、半ばトラウマになっていたのだ。

シャウトの対応に不貞腐れるルバスだが、この男の辞書に諦めるという文字はなかった。

「そうじゃ。そう言えば黄金竜以外にも古竜がいると言っておったな。それならどうにか都合できるか？」

「馬鹿かジジイ！ 古竜様だぞ！ 魔王国にいる竜人族とは別もんだ！ 俺やジジイなんぞ瞬殺されておしまいだ!!」

黄金竜が無理だと言われたルバスは、それなら他の古竜をと言い始める。無茶を言うなどシャウ

トが怒鳴ったのも仕方ないだろう。

「はあ、シャウトは頼りにならんのか」

「ふざけんあ！ 魔族をやめてリッチロードになつたくせに、文官のアバドン様にも勝てないマヌケに言われくないわ！」

「ワシは頭脳労働専門じゃからええんじゃ！」

「よかないわっ！」

ルバスが最も欲しているのは黄金竜の血だが、それが無理ならせめてと目をつけたのが他の古竜なのだが……それだつてとてもじゃないが、シャウトの手には負えない。正直にそう訴えるシャウトを、自分のことを棚に上げて頼りなく思うルバス。シャウトがイラつくのも当然だ。

「だいたいリッチロードのくせに、なんでそんなに弱いんだよ。だいたいお前が強ければ、黄金竜様や他の古竜様の血も必要なかったんじゃないか」

「仕方なからう。これでも強くなった方なんじゃ」

そもそも優れた魔法使いが未練を残して死に、その魂が濃んだ濃い魔力に晒されて発生するのがレイスやリッチだ。

レイスやリッチになった時点で、生ある者に対して攻撃的になる。そして長い月日、討伐されることなく生者を葬り続けた個体が、リッチロードに至る。

そうしてリッチロードに至った個体は非常に強力だ。

だがルバスは、レイスからスタートするわけにはいかなかった。

レイスになった時点で、魔族だった頃と変わらぬ理性や思考、知識はなくなる。ゆえに、独自に禁術を編み出したのだ。

凸凹コンビの言い合いは続く。

五話 チラチラ

草原地帯の城塞都市内に合同買取所を建てるという計画は、俺——シグムンドたちがびっくりするくらいスピーディーに進められている。

商業ギルドとは少しゴタゴタがあったわけだが、冒険者ギルドや薬師ギルド、錬金術師ギルドが協力的で、しかも鍛冶師などが加入している職人ギルドまでがぜひ協力させて欲しいと言ってきたらしい。

それで早くも物資の搬入が始まっている。

「場所をあそこでもよかったのか？ もっといい場所もまだ空いてるぞ」

「魔物素材を扱いますので、中心部から少し離れた場所に広い敷地がある方がいいのです。あとは門が近い場所をと考えました」

合同買取所の建設予定地は、城塞都市の中でも少し端の方になる。それでセプールに聞いてみたんだけど、ちゃんとした理由があったようだ。

「それもそうか。まあ、セプールに任せただから、俺としては文句はないよ。あとは適当に頼む」

「お任せください。旦那様」

「ああ」

各ギルドから魔王国以外の人間も大勢来るだろうから、俺が前面に出ない方がいいだろう。怖がらせても悪いしな。

ところで、一番遠いはずの魔王国から、早くも草原地帯へと駆けつけた者たちがいる。

一人はダーヴィッド君。一応、魔王国側の責任者として来ている。

ダーヴィッド君はこの城塞都市には一番通っているし、セプールとも知り合いだし、何よりいろいろと世話になっている。今度、何か贈りものでもした方がいいかな。

それで、その魔王国から来たメンバーのうち、護衛の兵士以外で人数が多いのが竜人族たちだ。

一応、高い身体能力を買われて、作業員として来ているはずなんだが……

「……あれ、仕事になるのか？」

「一応、ちゃんとしているようですが……」

俺の問いにリーファが煮え切らない答えを返す。

セブルが、作業員やギルド関係者の宿泊場所や食事などに関してダーヴィッド君と話し合っているの、俺はリーファをお供に作業の様子を見て回っていたのだった。

「ああ、一応仕事はしているみたいだな。まあ、作業は遅れていないようだし、いいんだけどな」

「そこは、身体能力の高い竜人族ですね……真面目に作業に集中すれば、もつと捗るのはなでしょうが」

竜人族たちがさぼっているってわけじゃない。作業の合間に、ある場所をチラチラと見ているだけだ。

まあ、ある場所ってのは人化したオオ爺サマが暮らす家なんだけだな。

「気持ちに分かるけどな」

「ですね。竜人族にとって信仰の対象であるオオ爺サマや他の古竜様たち、自分たちの始祖と同じ竜人であるギータたちが近くにいますから」

オオ爺サマ以外の四体の古竜（ヴァイス、ロツソ、ブラウ、ジョーヌ）は、いつも全員いるわけじゃないが、それでも古竜がそこにいるのは竜人族なら分かるだろう。

古竜たちはみんな、周りへの影響を配慮して魔力や気配を抑えているけど、それでもなおその存在感は隠しきれないんだよな。

それに加えて、ギータやグラース、ゲイル、メールというオオ爺サマが生み出した眷属の竜人が

いる。

ギータたちは古竜のお世話係ではあるが、ちよくちよく家から出てくる。

料理は屋敷の料理人であるシブルの仕事だけど、その食材の調達なんかはギータたちも手伝うんだ。特に魔物肉を狩ってくるなんてシブルには難しいからな。

「そういえば一竜に一人の眷属がつくって言うってたけど、四人じゃ一人足りないな」

「オオ爺サマ以外の古竜様たちが全員揃うことはほとんどありませんから」

「それもそうか。なら問題ないか」

ちようどギータがオオ爺サマの家から出てきて、それに竜人族たちが反応してガン見しているのを眺めながら、リーファと無駄話する。

「ギータたちと接触したいんだろうな」

「魔王陛下から止められているから抑えているようですが。まあ、ダーヴィッド殿下が一度くらい機会を設けると思います」

「その方がいいか。ゲイル辺りは女の竜人族と積極的にコミュニケーションとりそうだしな」

「……間違いないようになりますね」

俺がゲイルの名を出すと、リーファが眉間に皺を寄せて頷いた。

風竜のドラゴンオーブから生まれたゲイルだが、他の竜人と違いとても軽い。いや、チャライと言ってもいいだろう。同じ竜人のギータやグラース、メールが真面目な感じだから、余計にそう思

うのかもしれないがな。

「まあ、女の竜人族にとつてはいいことじゃないか。カタブツのギータとグラスじゃ、竜人族の男どもには難しいだろうがな」

「そうですね。しかし、男の竜人でもメール殿は真面目過ぎるくらいなのに、どうしてあんなったのでしょうか」

「まあ、賑やかでいいじゃないか。うちの眷属にもヤタっていう賑やかな奴がいるしな」

「そうですね。でもヤタは普段西方諸国に多いので、ゲイル殿のように四六時中一緒、というのは違いますけどね」

「……ヤタと四六時中一緒か、それは大変かもな」

四人の竜人はゲイル以外はすぐ真面目な性格なんだよな。自分たちからすれば神と等しい古竜に仕えるために生み出されたんだから、自然とそうなるのかもしれない。

しかし、ゲイルならワンチャン色恋沙汰がありそうだな。男女間のトラブルが起きないように注意しておくべきかな。一度、オオ爺サマと話しておくか。

六話 衝撃

大陸の北端。魔王国でも竜人族しか暮らさないその土地に衝撃が走った。

「何だとお!? ギータ様以外にも始祖様がいるじゃとお!!」

「しかも、黄金竜様や他の古竜様が人化して城塞都市内で過ごしているじゃとお!？」

城塞都市から届けられた驚愕の報せに、竜人族の長老たちと主だった者たちが叫ぶ。

自分たちの始祖と同じ竜人であるギータ。その存在を知ってから、竜人族の男連中は目の色を変え、草原地帯へ行くことを望んだ。

そこに新たに三人の始祖が現れたというのだ。しかも、ギータは女性だったので騒いだのは竜人族の男連中だけだったが、今回は男性の始祖もいると言う。この報せに、年老いた者や幼い子供を除き、竜人族全体がざわついた。

しかも竜人族にとって神に等しい黄金竜や他の古竜が、人化して城塞都市内で暮らしているという。

「合同買取所建設の手伝いに派遣する人員を増やすか」

「それを口実にしても送れる人数は限られておる。誰が行くかでもめるのは避けられん」

「しかも、今回は男性の始祖様もおられるという。全集落の若い女が黙っておらんぞ」

「ああ、パートナーのいない未婚の若い者は、男女問わず行きたがるじゃろうな」

草原地帯に行く機会を増やすために茶葉の交易を考えたのだが、それだけでは若い衆は納得しないだろう。

ギータという女性の竜人の存在が知れ渡り、竜人族の若い男たちが目の色を変えた。それが、今回は男性の竜人もいると分かって、集落の若い女たちが騒ぐのを止められなくなりそうだ。

「ギータ様にコテンパンにやられたと話しても諦めんからの」

「ああ、前回やられた奴まで、もう一度と草原地帯行きを申し出てくる始末じゃ」

「理由もなく送れんしろう」

「ああ、あ奴ら、何はなくともまずは黄金竜様じゃろうに」

長老たちの溜息が止まらない。竜人族にとって、神に等しい存在である古竜を詣でるのが第一のはずなのに、若い竜人族は自分たちの始祖であるギータたちが目当てになってしまっている。そのことを嘆かずにはいられなかった。

「ワシらとて古竜様方に詣でたいというに……」

「そうじゃ。黄金竜様以外の古竜様方にもお会いできるかもしれんというに……」

長老たちの愚痴はしばらく止まらなかった。



暗い地下の部屋で、二人の男が言い合っていた。

「なあシャウト。やはりもう一度、草原地帯に行ってくれんかのう？」

「ふざけんなルバスのジジイ！ 何度も言うが、あんなおっかねえ場所に行けるかあ！」

ルバスがやれやれと首を横に振る。

「古竜様の血が欲しけりや、ジジイ、手前で獲ってくりやいいじゃねえか！ 俺に言うな！」

「聖なる古竜など、ワシの天敵じゃぞ。無理に決まっておる」

「威張^{いば}って言うことじゃねえだろがっ！」

シャウトは魔族だけあり、古竜に対して特別な思いがある。他の魔族と同じく信仰の対象だった。それを元とはいえ、魔族だったルバスが古竜を相手に不敬なことを企^{たくら}む方がおかしい。

「なあ、何とかならんか？ 古竜の血があれば、ワシも魔王くらいには勝てそうな気がするんじゃ」

「勝てそうな気がするってだけで、俺を死地に向かわせるなっ！ だいたい魔物にまでなった癖に、なんでジジイはそんなに弱いんだよっ！」

ルバスの魔王に勝てそうな気がするという、曖昧^{あいまい}な願望混じりの発言にシャウトがキレる。

「仕方ないじゃろう。ワシは研究が専門で、野蛮な戦闘なんぞは苦手なんじゃ」

「それでも元魔族かよ」

「そもそもなんでも力で決めたがる魔族の方がおかしいんじゃない。じゃから先代魔王のような乱暴な者が王になる」

「こいつ、本当に元魔族か疑わしくなってきたな」

力こそ全ての人間が多い魔族において、ルバスは変人中の変人だ。魔法は得意だが、攻撃魔法に興味はなく、ルバスが関心があるのは研究に使える魔法だけ。

人族や魔族の犯罪者をシャウトに攫^{さら}わせ、人体改造などという倫理観の欠片もない非道を平気で行う。そこに罪悪感はないさそう。

本来、リッチロードは魔王国でも討伐に苦慮^{くりょ}するレベルの魔物だが、もともと大して強くないルバスが、禁術により至った存在だからなのか、レイスに毛が生えた程度の実力しかない。

シャウトが呆れてバカにするのも分かる。

まあ、ルバスは「これで寿命から解き放たれたから良しとしよう」とものすごくポジティブ思考だ。それが余計にシャウトをイラつかせているのだから……

その後、余りにしつこいルバスに折れる形で、シャウトは仕方なく草原地帯へ行くことになった。

「情報収集だけだからな！」

「分かった。分かった。ワンチャンありそうなら頼むぞ」

「あるか！ そんなもん！」

とことんあきらめの悪いルバスだった。

七話 コソコソ

俺——シグムンドは以前にも感じた覚えがある魔力を察知した。

敵意がないので基本的には放置だけど、それが人族や獣人族じゃなく、魔族なのが少し気にかかる。

「ご主人様。どうかされました？」

「いや、たいしたことじゃないんだがな」

「ああ、この魔力は、私の顔見知りの使いの者ですな」

首をかしげていると、今日も影のように俺の側に付き従うリーファから何かあったか聞かれたが、遅れて同じく察知したセブルが割って入ってくる。どうやら俺が見つけた人物に心当たりがあるようだ。

「旦那様、始末致しますか？」

「イヤイヤ、まだ何もしていないのに、流石に可哀想だろう。それに魔族だろう？」

セプールがなんでもないように物騒なセリフを口にする。魔王国と友好な関係を保っている手前、何も悪いことをしていない魔族を始末なんてするつもりはないぞ。

「アレは、私の顔見知りの相棒みたいなものです。その顔見知りがろくでもない者でして……」

「何？ 犯罪者か何か？」

「ギリギリ魔王国から手配されるようなことはしていません」

セプールによると、その知り合いの相棒の魔族は、多分草原地帯を探りに来ているのだらうということだ。

その顔見知りの話を聞くに、相当変わり者の魔族らしい。

少々……いや、だいたい倫理観を投げ捨てたマッドな研究をしていたそうだ。

「かなりの実力者なのか？」

「いえ、魔族基準でもたいしたことはないかと」

「あれ？」

「戦闘ではなく研究に極振りしていますから」

「ああ、なるほど」

いわゆるマッドサイエンティストって奴か。非道な実験もしているらしいが、極悪人の犯罪奴隷を買って被験者になっているので、魔王国も見逃しているそうだ。

「どうせろくでもないことを企んでいるのでしょう。やはり実害がでる前に始末致しますか？」

「いや、情報収集だけなら問題ないよ。それに探ってるのは一人だろう。余計に馬鹿なこととはしな
いと思うぞ」

セプールが厄介ごとを起こす前に始末する提案をしてきたけど、流石にそれはやめておく。情報
収集だけならそんなに気にすることもないだろう。

「旦那様がそうおっしゃるのなら監視にとどめましょう」

「それか、いっそ直接話を聞くかだな。まあ、正直に話すかは分からないが」

「それもありですな。それに旦那様なら、容易く精神を読み取れるでしょうし」

「いや、やらないよ。あきらかな犯罪行為に走ったなら別だけど、コソコソ探るくらいで、闇魔法
を使ってまで情報を吸い取るなんてしないぞ」

セプールの言うことがいちいち怖い。確かに闇魔法を使えば、情報を頭から直接抜き取ることも
簡単だけだな。

「では、しばらくコソコソしているようなら、直接話を聞くことにしましょう」

「そうだな。害はないとはいえ、コソコソ探られるのは気持ちいいことじゃない」

その魔族は、敵意や害意を外に出さないよう細心の注意を払っているみたいだから、問題にはな
らないだろうけど。

とりあえず様子を見て、一度話を聞くか。



本当に、あのジジイは諦めが悪い。

俺——シャウトは二度と近付きたくなかった草原地帯へ来ている。

それもこれも、あの頭のおかしいジジイがうるさいからだ。

そこまでジジイに恩があるわけじゃない。食えない子供の頃に食わせてもらった程度だ。

そのくらいの恩、大人になる前に返したはずなんだが、食わせてもらったっていうのは頭で考えているよりも俺の中で大きいんだろうな。

「はあ、古竜様ってなんでもアリなんだな。それに始祖の竜人か……ジジイが喜びそうだけど、言いたくない」

草原地帯に戻ってきて最初に判明した変化は、城塞都市の外でくつろいでいた黄金竜様がいなくなっていることだ。

帰ったのか？　と思ったが、そのわけはすぐに分かった。

なんと黄金竜様は、人化して城塞都市内の屋敷で暮らしていた。そしてそのお世話係に、眷属である竜人を創りだしたらしい。これは城塞都市内に住む者ならみんな知っていることだったので、俺もすぐに知ることになった。

古竜は全部で五体だそうで、その内の黄金竜様が定住。他の古竜様方は、交代で訪れては休暇を楽しんでいるらしい。

古竜様方にも役目があるそうで、だいたい多くて四人の人化した古竜様が城塞都市にいて、四人の竜人が世話係をしているようだ。

古竜様の役目については、世界を整えるとか何とか、壮大過ぎて俺には理解が及ばない。

「しかし、古竜様はともかく、竜人ならワンチャンありそうだから始末が悪いぜ」

俺の目が節穴じゃなければ、古竜様が創った眷属である竜人は、魔王国に住む竜人族なんかとは比べものにならないくらい格上だと分かる。

魔王国の竜人族も魔族の中では強者で知られているが、古竜様が眷属にしている竜人は格が一つも二つも上だ。

とはいえ、始祖と言っても竜人は、古竜様に比べれば、俺たち魔族でも生涯を懸ければ手が届く可能性はある。

……勝るとは言っていないぞ。手が届くかもって話だ。

で、現状、俺やジジイじゃその竜人に勝てない。だけど血の一滴くらいは何とかなりそうなんだよな。

「まあ、古竜様や、その上の御方を敵に回すなんてあり得ないけどな」

そう。古竜様のお世話係である竜人に手を出して、古竜様やこの草原地帯の支配者が黙っている

わけがない。

ただ、あのジジイがそれで納得するかどうか。しないだろうなあ。嫌だなあ。もう本当に、ジジイから離れるか。

そんな考えが頭をグルグルと巡る。

そんな俺に、背後から声が掛かった。

「少しよろしいですか？」

「!?」

体が硬直する。俺が一切気付くことなく背後を取られるなんて。声を上げなかった自分を褒めたいくらいだ。

なるだけ自然に振り返ると、そこにいたのは魔王国では有名人であるセブル殿だった。

あの暴虐^{ぼうとく}の先代魔王の側近にして、外縁部とはいえ深淵の森に屋敷を構えて隠居した、ジジイとはまた別のベクトルで頭のおかしな人物。

そして現在、この城塞都市を含めた草原地帯の支配者の部下であることまでは掴んでいる。

「私の仕える主人がお話を聞きたいとおっしゃっています。少しお時間よろしいですか？」

「ひゃ、ひゃい」

思わず声の上擦ってしまった俺は悪くない。

目の前に立つ人物が、俺やジジイが逆立ちをしても届かない領域にいるのが分かるから。

(クソツ！ 魔王よりもずっとやべえじゃねえか！)

この状況で、俺に否と言えるはずもなく、せいぜい心の中で毒づくのが精一杯だった。ちくしょう。恨むぜジジイ。

八話 嫌いじゃないよ

セブルが、コソコソと草原地帯を探っている魔族の男に声を掛けた。

魔族でも特に諜報方面が得意なようで、直接の戦闘力はそうでもないのかな？

まあ、俺からすると、魔王も魔族の子供もドングリの背比べなんだけどな。

セブルに連れて来られた魔族の男を改めて観察する。

直接的な戦闘能力はルノーラさんどころか、ミルやララよりも少し落ちるか。まあ、対人戦の経験が乏しいルノーラさんたちよりも、この男の方が実戦では有利だろうけどな。

「やあ、はじめまして。俺はシグムンド。一応セブルの主人だな」

「あ、ああ、シャウトだ」

「ふむ。それで、依頼人の名前は？」

「ルバスっていう奴だ」

意外と言ってはなんだが、諜報系に特化したような男の割に、素直に俺の質問に答えてくれる。しかも、事前にセブルに聞いていた内容と違いがない。

ただ、セブルも思わずポカンとする話まで飛び出した。

「えっ!? ルバスがリッチロードですと?」

「あ、ああ。ただ、無茶な禁術だったみたいで、本来のリッチロードほどの力はないらしい。分かりやすく言うと、魔王陛下や武官長のイギリスはもちろん、文官長のアバドンやデモリス老よりも弱いんじゃないかな」

シャウトと名乗った男の話に、セブルは呆れて首を横に振って溜息を吐いている。

「前から頭のネジが二、三本抜けた変な人物でしたが、魔族から魔物に至るとは……」

「それでたいして強くなかったんだから、頭のおかしなジジイだ」

「まあ、ルバスは魔族では珍しい研究一筋の男でしたから。ですが、少なくとも寿命はなくなったのでしょから、成功と言えるのでは?」

「ジジイは成功と思っていないから、俺は魔王国からはるばる草原地帯まで来ているわけがな」

セブルとシャウトの話を聞いて、俺はルバスという男に、ある意味感心してしまった。

「ガッツあるなあ。そのルバスっていう奴。魔族からリッチロードになるのが進化と言えるかどうかは分からないが、そんなチャレンジ、普通なら絶対しないぞ」

「ええ、進化とは生半可な^{なまはんか}ことではできませんからな」

俺はともかく、セブルも進化を経験しているから、それが普通のことじゃないと分かっている。セブルとリーファの二人は、俺の血を分けた眷属だ。逆に言えば、眷属にならなければ進化などとは無縁だっただろう。

まあ、ルノーラさんたちみたいに魔力の繋がりによる眷属化でも、種族が変わらない形で進化はしただろうけどな。その場合、二人の元の種族であるアルケニー種の中の進化だ。

ちなみにリッチロードは唯一、人族やエルフ、魔族などの種族にかかわらず至れる可能性のある魔物だ。元の実力が高い者が、強い^{うしろ}怨みを残して死んだ後、濃い魔力に晒され、なおかつ長い時間を過ごすことで進化する。

しかし、生前どんな実力のある魔法使いだったとしても、魔物となった時点でいきなりリッチロードになどなれない。せいぜいがレイス。よほど実力があり怨みも強く、瘴^{しやうき}気に穢^{けが}された濃い魔力に晒されたとしても、リッチが精一杯だろう。そこからリッチロードに進化するなんて、とてつもなく長い時間がかかる。短期間でなんて、深淵の森のダンジョンでもない無理だ。

「いや、それにしても愉快的な奴だな。頭のネジが二、三本と言わず、ごそつと抜け落ちてるんじゃないか?」

「まあ、魔族だった頃から変わった御仁でしたから」

セブル曰く、そいつは魔族だった頃から変人だったらしい。まあ、そうだろうな。

「ご主人様は、魔物になったルバスに対して寛容ですね」

「それはなあ。まあ、俺もスタートはゴーストだったからなあ」

リーファは、ルバスがリッチロードになったことを聞いて、俺が面白そうにしているのが意外みたいだ。ただ、俺自身がゴーストスタートで、特殊な個体だったが、リッチロードも通った道だからな。それで親近感を覚えているのかもしれない。

「ご主人様がゴーストだったなんて、何度聞いても信じられません」

「今から考えると、そもそも俺は普通のゴーストだったか怪しいけどな」

リーファに答えた俺の言葉に、セブルが頷く。

「そうですね。ゴーストにしっかりとした思考などありませんから。聞くとところによると、旦那様はゴーストの頃から理性的だったと。そのようなゴーストは存在しません」

「だよな。俺もそう思う」

信じられないと言うリーファの反応が普通なんだろうな。当時の俺のステータスには確かにゴーストとあったが、今になってみれば、そもそもゴーストが自分のステータスを確認している時点で異常なことだと分かる。

しかし異常具合で言えば、その魔族も相当だろう。

「よし。面白そうだし、会ってみるか」

「えっ!? ジジイに会うっていうのか! もの好きだな」

「孤児院の子供たちや住民に迷惑をかけられる前に会った方がいいだろう。それに、オオ爺サマを

どうこうできるとは思わないが、迷惑はかけたくないしな」

俺がルバスについていうリッチロードに会うと言うと、シャウトは驚いた様子をみせる。だが、変にトラブルを起こす前に会った方がいいだろう。

まあ、半分は面白そうだからだけだな。

九話 合同買取所

魔王国で話し合いの場がもたれ、一応関係者たちの賛同を得て「合同買取所」を造ることになり、建設予定地を俺とセブルで決めた。俺が直接、合同買取所の建物を建設することはないが、土地の所有者である以上、縄張りまでは面倒みないといけないからな。

ちなみに、なぜ「関係者たちの賛同を得て」の前に「一応」が付くのかというと、商業ギルドが欲をかってゴネたからだ。

それ以外の冒険者ギルド、錬金術師ギルド、薬師ギルドは、先日の魔王国での話し合いで、無条件で全面的に魔王国に協力すると約束した。それで、合同買取所の建物の中に出張所となる支部を置くことが決まっている。

俺やセブルたちが素材を卸し、欲しいギルドがそれを買取る。競合した場合はセリにするの

か、それともどこかのギルドが調整して話し合いで決めるのかは未定だ。

どのギルドが主体となって運営するのも決まっていない。それぞれのギルドから人を出して共同で運営すればいいと思うんだけどな。

ところで、そこに竜人族が独自に出張所を置くのか、それとも冒険者ギルドが窓口になるのかは、まだ調整中らしい。

竜人族の長老は独自に出張所を置きたいみたいだ。

何せ竜人族は、黄金竜の才爺サマ詣でをするのが目的なんだから。できるだけ自由が利く形にしたいんだろう。

もう竜人族は、草原地帯の入り口辺りに集落を造ればいいんじゃないだろうか。俺さえ認めてしまえばアスラ——グレートタイラントアシュラベアという、咆哮^{ほうこう}一つで軍隊を丸ごと気絶させてしまうSSランクの魔物だ——の巡回もあるし、深淵の森の魔物が襲うこともないだろう。

ちなみに、俺はこの件はダーヴィッド君に丸投げして調整してもらっている。俺からの要望なんてないしな。何か思いついても、セブルが先に言ってくれてるだろう。

俺としては、ボルクスさんが戻ってきて責任者として働いてくれたらいいと思うんだけど。でも、今はハーレム冒険者パーティーを楽しんでるから無理だよな。俺でもハーレムパーティーを選ぶ。

まあ、城塞都市に子供を預けて出稼ぎしている身としては、どうかと思うが……

それは置いといて、そもそも合同買取所に俺は関与していないので、ボルクスさんをねじ込むの

も違うか。俺はあくまでスペースを貸してるだけだ。

俺がそんな事を考えながらポーっとしてると、ダーヴィッド君が近付いてきた。

「シグムンド様。広さはこのくらいで大丈夫でしょうか？ 無理ならもう少し小さくします」

「んっ、いいんじゃないか。このくらいなら各ギルドもそれなりに人を置けるだろうしな」

縄を張りマーキングされた敷地を確認して、オッケーを出す。土地はまだまだ余裕があるから少々広くても大丈夫だ。

実は城塞都市の外に農地を拡げて、逆に城塞都市の中の農地は減らしたんだ。住民が増えた分、必要なお店や施設が増えたからな。

とはいえ、お店や宿なんかは充実しているとは言えない。どの種類のお店も、まだまだ順調に売り上げを出せてはいないようだ。なんでも屋とか雑貨屋みたいなが多いようだし。

「ありがとうございます。では、この範囲で縄張りを始めます」

「うん。頑張つて」

ダーヴィッド君が部下と一緒に自ら縄張り作業をしている。彼、魔王国の王子なんだけどな。



シグムンドがダーヴィッドと合同買取所の建設場所を決めていた頃、さっそく魔王国の竜人族たちが動いていた。

各集落の代表者が集まっている。

普段ならこの集会は一年に一度集まればいい方だった。それが、黄金竜のオオ爺サマが草原地帯に居着いてから、もう何度目の集会になるだろう。

今回も当然、オオ爺サマ絡みの議題だ。

「俺は黄金竜様のお社^{やしろ}を草原地帯に建てるべきだと思う」

「お社を建てるのは問題なからう。じゃが、城塞都市の中には無理じゃ」

「なぜだ！」

竜人族の若手代表の青年の主張に対し、長老の一人が、社を建てる場所を城塞都市の中にするのは無理だと口を挟んだ。竜人族の青年が反発して大きな声をあげる。

「それはワシが黄金竜様から忠告されておるからじゃ。あの地は、黄金竜様の土地ではない。黄金竜様を始めとする古竜様方が頼り助力を願った御方のものじゃ。黄金竜様からは、くれぐれも迷惑をかけぬように言われておるのじゃ」

「……そ、それは、仕方ないですな」

長老の説明に竜人族の青年も何も言えなくなる。古竜以上の存在などにわかに信じ難いが、深淵の森の奥に暮らし、誰も支配できなかった草原地帯を統べる存在なのだ。尋常な存在でないことくらいは青年にも分かる。

第一陣で挨拶に向かった長老が、直接黄金竜様から忠告を受けたのだ。それを違えるなどあり得ないということくらい、若手とはいえ理解できる。

なにより主立った竜人族は、草原地帯の支配者であるシグムンドがどんな存在なのかは、魔王国の第二王子であるダーヴィッドから耳にタコができるくらい聞いていた。

深淵の森と隣接する草原地帯に人々が暮らしても魔物の餌場にならないのが、そのシグムンドのお陰だということも説明されている。そんな存在に逆らうなどあり得ない。

そして長老が一つの提案をする。

「そこでじゃ、草原地帯の城塞都市近くに、具体的には城塞都市から日帰りできる距離に、ワシらで集落を造り、そこにお社を建てるのはどうじゃ」

「いや、長老。草原地帯に集落など、俺たち竜人族でも自殺行為だろう」

「慌てるな。当然、森神様にお伺いをたてる。許可していただけたなら、森からの魔物も心配はいらぬだろう」

偶然にもシグムンドも考えていた、草原地帯に竜人族の拠点を造るという案が出され、その場の